
聞いてください

人鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聞いてください

【Nコード】

N6311S

【作者名】

人鳥

【あらすじ】

願いを叶えることには勇気がいる。そんなお話。

あなたは願いを叶えてくれる存在を信じますか？ 神様でもランブの精でも構いません。魂を代償とする悪魔や、結局は不幸に陥る猿の手などでなければ良いのです。

これからお話しするお話は一人の女の子が主人公なのですが、その女の子の前には形容し難い何かが現れたのです。それが何なのかはわかりません。姿が見えないのです。ランプは持っていないですし、手の木乃伊も持っていません。何かまじないをした記憶もないのです。とにかく、言葉では説明のしようもない何か、女の子の前に現れたのです。

それでは、前置きはこれくらいにしまして、お話に移るとしまし
よう。

ああそうそう、女の子の名前は、百ももといいます。

百は公立高校の二年生です。引っ込み思案な性格のせいで、どうも高校生活はうまくいっていないようです。いじめられているなどということはないようですが、人間関係は希薄なようです。

「……………」
百はとても無口です。引っ込み思案であるということもあるのですが、漠然とした不安が彼女をそうさせているのです。自分の部屋で休んでいる今でさえ、胸はモヤモヤとしているのです。

願いは決まったかい？

と、そんな声が聞こえました。直接頭に響いてきているようなその声は、男性とも女性ともつかない中性的な声です。

願いは三つまでだよ。三つまでなら何でも叶えてあげる

声の主が一体誰なのか、百にはわかりません。どうして自分の願いを叶えてくれるのか、どうして他の誰でもなく自分なのか、それ

さえもわからないのです。

百には××××という願いがあります。けれども百には、その願いを口にする勇気がないのです。もちろん××××という願い夢以外にも、お願いしたいことがあります。けれどもやっぱり、それを言う勇気がないのです。

それに、三つじゃ足りないよ。

まあ時間はあるから、後悔しないように決めてよ

誰かは言います。

どうあれ、百は一つ目の願いは何にするかは決めていました。必要なのは、それを口にする勇気です。

「じゃ、じゃあ……一つ目の願いを叶えてください」

勇気を振り絞り、雀の涙ほどの涙の勇気を振り絞って、百は震える声で言いました。もじもじと指を動かしながら、見えない『誰か』にお願いをします。

もちろんだよ。なんだい？

『誰か』は優しい声で問いかけました。聞く人を安心させる声を聞き、百はいよいよ口を開きました。

「ぼ……わたしは」

僕でいいよ。変な気は遣わないは必要ないからね

百は男系家族の生まれで、男兄弟に囲まれて育ちました。生来のおとなしさに変化はありませんでしたが、いつのころからか『僕』というようになりました。百はそれを恥ずかしいと思いつつ、直すこともできずに今に至ります。

「僕は憶病なんです」

なんとなく、わかるよ

優しく、『誰か』は答えました。

「本当はしたいことがあるのに、それを言う勇気がないんです。だから、その……ぼくに、願いを大きな声で言える勇気をください」
たった一つの犠牲を避けるために、百の利益を諦めてきた百にとって、願いを言うことはとても勇気のいることなのです。

わかったよ。その願いを叶えてあげる

『誰か』は少しの沈黙の後、いつもの柔らかい声で言いました。

「ありがとうございます」

百がどこへともなく頭を下げると、『誰か』は苦笑のような声をもらしました。姿が見えないので何とも言えませんが、もしかしたら照れているのかもしれない。下げた頭をゆっくりとあげ、不思議そうに首をかしげました。

「変わった気がしないんですけど」

百は何も変化を感じませんでした。自分が本当に勇気を得たのかわからなかったのです。けれども『誰か』は、自信ありげに答えました。

心配はいらないよ。明日学校に行けばわかるよ

「は、はい。じゃ、じゃあその……おやすみなさい」

「うん、おやすみ」

百は疑問に思いながらも従い、まぶたを落としました。明日の自分に夢を見ながら。

翌日、学校に着いても自分の願いが叶ったとは思えませんでした。そついう実感がまったくわかないのです。

「百は就職なんだよね？ 聞いたことないけどさ、どんな仕事がしたいの？」

高校の二年生にもなると、自分の進路を本格的に考えなければなりません。百は就職を希望していました。

声をかけてきたのは奈々という女の子で、小学校からの付き合いがある友達です。

「僕は がしたいんだよ」

百が言ったのは、个性的でこそあれ、あまり人がやりたがるものではありませんでした。必要で大切ですが、大変な仕事だからです。この高校にはあまり多くない求人の中に、少なからずそついう職の求人が紛れ込んでいるのです。

「えーっ！ それがしたいの？ やめときなっつて！」

案の定、奈々は百に考え直すようにうながしました。けれども百は、どうしてもその仕事がしたいと思っていました。

「で、でも、僕はやりたいよ」

奈々は一瞬、驚きに目を開きました。というのも、百が自分の主張を堂々と表したのは、奈々の知る限り初めてのことだったからです。百にその自覚はありませんが、これは驚くべきことなのです。

「でもさ、ふつうの人はやらないよ」

百に反論されたことが悔しくて、つい責めるように言ってしまいました。奈々は内心で自分に毒づきながら、百の反応をうかがいます。

「……うん、そうだね」

百はうなずきました。どうして奈々が自分の考えを、夢を理解してくれないのか、百にはわかりませんでした。

「もう一度、ゆっくり考えてみるよ」

「うん。そうしたほうがいいよ。じゃ、またあとで」

奈々は百が落ち込んでいることがわかっていましたが、あえて何も言いませんでした。いえ、言えなかったというほうが正確かもしれません。何も言わないまま、他のグループのところへ行っていました。

百は立ち上がり、教室を出ました。奈々にはきつと自分を打ち明けても良い、彼女はそう考えているのですが、どうしてもそれができるきないのです。ずっと一緒にいたのですから、それができる仲だろうと思うのです。けれども奈々と自分はどこかがすれ違っているという感覚が、百の中にはあるのです。

「わかり合って難しいなあ」

呟いて、はたと思い当るものがありました。奈々にわかってもらう以前に、そもそも、百は奈々をわかっていないのです。わかつうとしていないのではなく、文字通りわからないのです。あのすれ違いの感覚の中で、お互いがお互いを見失っているのです。

「……やめておいたほうがいいのかな？」

そうは言っても、百に　をしたいという気持ちを変えられるとは思えません。したいと思いなから、周囲の目に責められ、しかたないと自分に言い聞かせながらそれを諦めるのがせいぜいでしょう。

百にはそれがわかっていました。だからなのでしょう。

百は前回と違う強さを願いました。

「二つ目の願いを叶えてください」

周りに誰もいないことを確認して、百は口を開きました。

「今回は早いね。いいよ、言っただらん」

『誰か』は優しく答えました。『誰か』の声はいつでも優しく百に投げかけられます。

「寂しくてもうつむかない強さをください」

単刀直入に切り出しました。

「僕は人と違うものになりたいんです。レールの上を走るような、型どりの未来は嫌なんです。……大きな自分になりたいんです」

しかし、人と違うことが怖いのです。人と違うものになりたいと願っているのに、人と同じでないと生きていけないようにも思えるのです。

「僕は僕の中にある矛盾を取り払ってほしいんです」

他人と違うようにあることと、他人と同じようにあることは相容れないことです。百はそのことに苦しんでいました。彼女ではどうしようもない、大きな矛盾なのです。

『誰か』はしばらく黙っていました。もちろんさ　と答えました。『誰か』にとつて、百が何を望むのかは問題ではないのかもしれない。それこそ、百が願いを百個叶えてほしいと言えば、百個叶えてしまいそうにも思います。

しばしの沈黙ののち、『誰か』は言いました。

「もう願いは叶っていると思うよ」

言われてみれば、さっきまで自分の胸を苛ませていたモヤモヤと、恐怖にも似た不安が感じられなくなっていました。他人と違う道を

歩むことに対して、未知への不安以外は不安を感じなくなったので
す。

こうして、百の二つ目の願いが叶えられました。

さて、こうして二つの願いを叶えた百ですが、残っているのはあ
と一回です。彼女は一体何を願うのでしょうか。

あなたなら、最後の一回に何を願いますか？

「さあ百、あと一回だけ願いを叶えてあげる。君は何を望む？」

二つ目の願いを叶えた日の夜、『誰か』が唐突に切り出しました。
百はすでにその願いを決めていたので、この問いかけにはすぐに答
えることができました。

思えばいくら願いが決まっているからといって、あの百がすぐに
答えられるというのは不思議なものです。これも一つ目のお願いの
結果なのでしょう。

「ずれちゃうんです」

うん？

『誰か』は百も意図がつかめず、初めて聞き返しました。

「僕は僕のことをわかってもらいたいです。でも、僕も他の人の
ことがわかりません」

百の脳裏に浮かぶのは奈々の顔。たくさん話をしてきたはずな
のに、触ってほしい場所に触ってもらえず、自分もまた触れないの
です。すれ違って重ならないまま、今までずっと過ごしてきたので
す。

「でも同じ人間、同じ言葉なら大丈夫だって思ってたんです。
それでもなぜかずれてしまっんです。僕の前にいる人は本当にそこ
にいるんですか？僕はそれがわからなくなってしまうんです。だ
から目の前の人を本当にそこにいるっていう確信をください」

そうだね。それは大切なことだよ

そう言った『誰か』の声は、どこか憐れむような雰囲気があり

ました。

じゃあ、その願いを叶えてあげる

三つ目の願いが聞き届けられました。特に何が起きたわけではありませんが、百にはその願いが叶ったことがわかりました。確信にも似た何かが、自分の胸の中にあるのです。

こうして、百の願いは叶わなくなりました。

「さあ」

三つ目の願いが叶った百が、努めて明るく言いました。姿は見えませんが、『誰か』はまだこの場にとどまっているように思っただけです。実際にそこにいるのかは確認のしようがありませんが。

「これで準備は整いました」

今までの三つのお願いは、 $x \times x \times x$ という願いを叶えるために、叶った時に自分が耐えられるために必要なことでした。自分の願いを叶えてしまうことには、勇気が必要だったのです。

「最後のお願いを 四つ目の願いを聞いてください」

(後書き)

無いとは思いますが、本家様にご迷惑をかけないようにしてください。

三つの願いが叶った時点で、本当の願いを叶えるだけの力には手に入れたでしょう。きっと自力で頑張れます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6311s/>

聞いてください

2011年11月16日20時48分発行